

論文

犬のイメージに関する一考察

—中国のことばと文化

鄭 高 咏

要 旨

犬は人類最古の家畜にして最古の友であり、その家畜化の歴史は古く、旧石器時代にまでさかのぼるとされる。太古の昔、獵犬、そり犬、牧羊犬、豚小屋や家屋の番犬として、生活のありとあらゆる場面で大活躍していた犬は、人類にとって掛け替えのない存在であり、信仰の対象でもあった。しかしながら、古代中国の民俗語彙における犬のイメージは決して良いものではなく、犬と付く言葉は十中八九、マイナスの意味を帯びる。十二支の動物は、“牛馬精神”（牛馬のごとく働き、人に奉仕する精神），“龙虎气象”（竜虎のように気高く雄々しい気風）などの言葉が示すように、とかく崇高、立派といったイメージがあるが、犬に関してはそれは当てはまらない。犬との長い共生の歴史の中で、人類は犬に対して、その忠実さ、従順さ、利口さをめでつつ、その卑屈さをさげすむという、まったく異なる二つの態度を一貫して取り続けてきた。それゆえ、数々の聖なる忠犬の伝説が生まれると同時に、犬の自主性のなさをこき下ろす言葉も多々生まれることになったのだが、逆説的にいえば、この一見相矛盾する現象は、犬の一つの特徴を肯定と否定の両面から解釈した結果なのである。

キーワード：字源と別名、言語における「犬」、民話における「犬」、「犬」と十二支、イメージ

1 「犬（狗）」の字源と別名

漢字は典型的な象形文字でありながら、表意だけでなく、表音の機能も併せ持っており、その偏や旁などの部首は、古代人が自然界や実生活のありとあらゆる物事を分類して整理し、根源を探究した末に生み出した、彼らの知恵の集大成である。漢字の中でも「犬」が付く字は、ほとんどが犬とその仲間になんだものであり、許慎の『説文解字』には「犬部」の漢字が約86字、梁代の顧野王の『玉篇』には約293字が収められているが、無論、これらは犬に関する文字すべてを網羅しているわけではない。

人類最古の家畜といえば第一に挙げられるのが犬である。およそ1万2000年前の旧石器時代末期、人類が定住生活を始めて間もないころに家畜化された犬は、それ以来ずっと人間と共に暮らし、狩猟の良き片腕として働いていた。最古級の漢字の中に早くも「犬」の字が見られるのはこうした背景による。図1の縦向きに描かれたべた塗りの「犬」、一見絵かと思われるこれはトーテム時代の絵文字であり、口を開き、しっぽをくると丸め、まるで何かにキャンキャンと吠え立てているようなその姿は、今にも動き出さんばかりである。図2と図3はそれぞれ甲骨文、金文の「犬」の字で、かつて全体が塗りつぶされていたそれは線へと変貌してはいるものの、開いた口と丸まった尾という特徴は依然として残っている。しかしその後、発展と変遷を経た「犬」の字は、小篆（図4）では多少象形の名残をとどめてはいるが、既に記号的になりつつあり、隸書（図5）、楷書（図6）に至っては完全に記号化し、もはや象形とは程遠いものになってしまった。やがて部首としても使われるようになった「犬」の字は、さらに「犴」と略されて、この意味を表す「犴」に、音を表す「句」（古くは“钩” gōuと発音した）を添えた「狗」の字が新たに作り出され、ここにおいて、「イヌ」は象形文字から形声文字へと一大変化を遂げたのである。

絵文字



図1

甲骨文字



図2

金文



図3

小篆



図4

隸書



図5

楷書



図6

中国の古典の書籍に見受けられる犬の別称は数多く、例を挙げれば、“善噬”、“繫瓠”、“乌龙”、“鹄苍”、“神獒”、“家兽”、“吠云”、“乌喙”、“黄耳”、“白望”、“青曹”、“金畜”、“黄羊”、“守门侯”、“虎酒”、“轻足”（明・余庭璧『事物異名』卷下より）などがあるが、このうちのいくつかは犬の総称ではなく、特定の種名である。

2 言語における「犬」

犬と人間はごく近い間柄にあるが、中国語で「犬」と付く言葉は十中八九、マイナスのニュアンスを帯びている。そうした言葉を以下にざっと列記してみよう（かっこ内は直訳）。

“狗脾气”（犬の気性）：短気で怒りっぽい性格。

“狗才”（犬の資質）：能なし。

“狗扯皮”（犬のいがみ合い）：水掛け論をする。

“狗吃屎”（犬が糞を食べる）：つんのめって四つんばいになった様。

“狗蛋”（犬畜生）：人非人。

“狗东西”（犬め）：おやまあ。くそつ。こん畜生。当惑やいらだち、怒りを表す言葉。

“狗脸”（犬の顔）：かんしゃく持ちの顔。

“狗毛”（犬の毛）：人の髪の毛に対する罵倒語。

“狗命”（犬の命）：死んでも惜しくない命。命を価値のないものと軽んじていう。

“狗男女”（犬の男女）：破廉恥な男女。

“狗屁”（犬の屁）：愚にもつかないこと。

“狗养的”（犬の産んだやつ）：畜生。ろくでなし。

“狗咬狗”（犬のかみ合い）：悪人の内輪もめ。

“狗崽子”（犬ころ）：くそつたれ。下品な罵倒語。

“狗爪子”（犬の爪）：悪党の手下。

“狗屎”（犬の糞）：くず。鼻つまみ。誰からも忌み嫌われるもの。

“狗腿子”（犬の足）：悪事の片棒を担ぐやから。

“狗奴才”（犬の下僕）：人の手足となって悪事を働く者。

“癩皮狗”（疥癬の犬）：羞恥心のかけらもない人間。

この通り「犬」を使った罵倒語はそれこそ枚挙にいとまがないが、植物にもその名に“狗”を冠するものがあり、“狗肝菜”（ヤンバルハグロソウ），“狗骨柴”（シロミミズ），“狗脊”（オオカグマ），“狗筋蔓”（ナンバンハコベ），“狗鈴草”（タヌキマメ），“狗芥”（イヌナズナ），“狗日花”（ノカンゾウ），“狗尾巴”（ミズタデ），“狗蝇梅”（ロウバイ）などがそれである。では次に、成語や慣用語の中の「犬」を見ていこう。なお、犬に関する成語には、鶏と犬を対にしたものがいくつかあるが、これらについては別稿に譲ることにする。

① “驴鸣犬吠”（驢鳴犬吠）

この成語の元になった故事は唐代の張鷟の『朝野僉載』巻六にあり、ここでいう“吠”は犬の鳴き声を指す。北魏の人、温子昇は幼いころから学問に親しみ、文筆に優れていたため、長じて御史¹⁾を拜命すると、朝廷の膨大な文書や勅令の起草を一任された。韓陵山に定国寺が造営された際にも、皇帝から碑文の撰者を仰せつかり、彼の文章が石碑に刻まれたが、後に南朝の梁の使節として北魏を訪れた大文学者の庾信が、この『韓陵山寺碑文』を読んで温子昇の文才に深く感じ入る。常々自分の右に出る者はいないと自負し、北方の文人など齒牙にもかけていなかった庾信も、温子昇の文章には舌を巻き、帰国後、仲間たちから北方の文人の感想を問われて、“唯有韩陵山一片石堪共语……自余驴鸣犬吠，聒耳而已。”（韓陵山にあった碑文だけは一読の価値があったが、それ以外はどれもこれもロバが鳴いているか、はたまた犬が吠えているかのようで、耳障りな音を立てるのが関の山といった駄作揃いだった）と答えたのだ。つまらない文章をロバや犬の鳴き声のようだとあざけて“驴鸣犬吠”というのはここから来ている。この成語は皮肉のニュアンスを帯びたマイナス評価の語で、書き言葉で用いる。

② “白云苍狗”（白雲、蒼狗となる）

唐の詩人、杜甫の『可嘆』という詩から生まれた成語である。大暦二年（767年）末ごろの作と伝えられるこの詩は、都へ上る友人を激励するもので、“天上浮云似白衣，斯须改变如苍狗。古往今来共一时，人生万事无有。”という句で始まる。“斯须”はつかの間、“苍狗”は青黒い毛色の犬であり、この4句の大意は次の通りである。「空に浮かぶ雲はまるで純白の衣、ところがそれはあつという間に青毛の犬のような黒雲に変わってしまう。古来、すべてはこのようにはかないもの、人生の道を歩んでいればさまざまなことに出会い、何が起っても不思議ではないのだ。」後に“天上浮云似白衣，斯须改变如苍狗”の2句が“白

衣蒼狗”または“白云蒼狗”と縮められ、世の中の移り変わりが激しくて予想もつかないこと、あるいはこの世のすべては移ろいやすく、捉えがたいことを形容する成語となった。

③ “狗苟蝇营”（犬が餌をあさり、蠅が飛び回る）

宋の文天祥の『御試策一道』の中の“牛维马繫，狗苟蝇营，患得患失，无所不至者，无怪也。”（牛や馬を手当たり次第につなぎ止めるように、有力者と見ればだれかれ構わずよしみを通じようとし、利益を得るため血眼になっている様は、まるで餌にありつこうとする犬か、うるさくたかる蠅のようで、浅ましいことこの上ない。さりとて、損得に執着し、いかなることでもやりかねないやからゆえ、それも無理からぬことである）という記述が出典である。“苟”は目先の安楽をむさぼること、“蝇营”は蠅が汚物を求めて忙しく飛び回ることであり、“狗苟蝇营”は、犬のように恥じることを知らず、蠅のようにどこへでも入り込み、抜け目なく立ち回る様を表す。名利のためとあらば恥も外聞もかなぐり捨て、どんな悪事でもやってのけることのたとえで、“蝇营狗苟”ともいう。比喩性、描写性がやや強いマイナス評価の語であり、書き言葉として悪人について用い、本人の前では使わない。例文：“那些家伙专干一些狗苟蝇营的勾当。”（あいつらはなりふり構わず、自分の懐を肥やすことにあくせくしている）

④ “狗急跳墙”（犬がせいて塀を跳び越える）

『敦煌変文集・燕子賦』の“人急烧香，狗急募墙”（切羽詰まれば人は線香を上げ、犬は塀を越える）に由来する言葉で、人は窮地に追い込まれると、死に物狂いになって無謀なことをしてかすというたとえである。比喩的かつ描写的なマイナス評価の話し言葉で、くだけた場面において、多くは悪人について用いる。例文：“犯人被警察堵住逃路，他们狗急跳墙，持刀向警察扑来。”（犯人たちは警察に逃げ道をふさがれ、窮鼠猫をかむとばかりに、ナイフを振りかざして警官に襲い掛かった）

⑤ “狗拿耗子”（犬が鼠を捕る）

清の文康が著した『児女英雄伝』第三十四回の“你这孩子，才叫他娘的狗拿耗子呢！”（この子ったら、そんなことはおまえが口出しすることじゃないよ）から出た言葉であり、余計なお節介のたとえである。比喩的なマイナス評価の話し言葉で、よく本人に面と向かって使い、しばしばこの後に“多管闲事”（大きなお世話）という言葉が続く。例文：“这是我们家的事，跟你有什么关系。狗拿耗子，多管闲事！”（これは我が家のことで、あなたの知ったことじゃないでしょ。まったくでしゃばりなんだから。そういうのを犬の鼠捕りっていうのよ）

⑥ “狗尾续貂”（^{くびぞくちよう}狗尾続貂）

この成語の出典は『晋書・趙王倫伝』で、“貂”とは、かつて皇帝に仕える官人の冠の飾りとされたテンの尾のことである。晋の高祖^{しばい}司馬懿の九男、趙王司馬倫は永寧元年（301

年)、兄弟の孫に当たる恵帝司馬衷から帝位を篡奪して皇帝を僭称すると、古くからの家臣を次々と高位高官に取り立てて、兵卒や小役人にまで爵位を授けた。このためテンの尾で飾られた冠を着ける者が急増して一時テンの尾が不足し、窮余の策として犬の尾で間に合わせたところ、“貂不足，狗尾续”（テンの尾はなかなか手に入らないお宝だ、けど偉いお役人さんが多過ぎて、テンの尾が足りなくなった、それで代わりに犬のしっぽを付けたとさ）なる流行り言葉が世間でささやかれたという。本来、“狗尾续貂”は役人がやたらと多いことを風刺する成語であったが、やがて粗悪なものが立派なものに続き、極めて不釣り合いなことのたとえとなった。主に書き言葉として改まった場面で用いる語で、自分を謙遜して、優れた文章の後ろにつかない文章を付け足すという意味で使うことが多い。例文：“您的大作，小生受益匪浅，补了几笔，狗尾续貂，万勿见笑。”（小生，貴著から得るところが多くありました。拙文を少々書き添えましたが、どうかお笑いにならないください）

⑦ “狗血喷头”（犬の血を頭に吹き掛ける）

『金瓶梅』の“吃他骂的狗血喷了头。”（あの女、どうせ犬の血を頭にぺっと吐くみたいに、こっぴどくどやしつけるんだぜ）から出た成語であり、話し言葉、書き言葉、どちらでも用いる。くだけた場面で使うマイナス評価の語で、比喩性、描写性がやや強く、頭ごなしに罵倒することをいう。例文：“他火冒三丈，无法忍受这般欺辱，冲着对方骂了个狗血喷头。”（そんな侮辱に我慢がならず、彼はかっとなって相手をぼろくそにのしった）

⑧ “狗仗人势”（犬が人の力をかさに着る）

この言葉は、清の曹雪芹の『紅樓夢』第七十四回の“你就狗仗人势，天天作耗，在我们跟前逞脸。”（この人の威を借る犬め、毎日毎日騒ぎを起こしてばかり。なのに大きな顔をして）に見える。走狗や手先、あるいは悪党が主人の権勢に頼って威張り散らすことのたとえで、マイナス評価の話し言葉として、くだけた場面で使う罵倒語である。例文：“这个狗仗人势的小流氓，倚仗黑帮的头子，在这一地带胡作非为。”（バックにその筋のボスが付いているのをいいことに、あのちんぴらはこの辺りでやりたい放題だ）

⑨ “狗彘不如”（犬にも豚にもしかず）

“狗彘不若”ともいい、『荀子・榮辱』の“乳狗不遠游，不忘其親也；人也，下忘其身，内忘其親，上忘其君，則是人也，而曾狗彘之不若也。”（乳を飲む子犬がふらふらと遠くへ行かないのは、親を忘れないからである。人間も、自身のことはおろか、親兄弟、さらには主君のことまで忘れてしまうなら、犬や豚にすら及ばないのである。）に由来する。犬や豚よりなおひどいと思われるくらい、卑劣で恥知らずだ、と人をそしる成語である。話し言葉でも、書き言葉でも用いるマイナス評価の語で、比喩的な要素がやや強く、品行の悪いならず者への罵倒語として、くだけた場面で使う。例文：“对这样一个狗彘不如的人，

你还提他干什么！”（こんな犬畜生にも劣るやつに彼の話をしてどうしようっていうんだ）これと同じような用法の言葉に、“行同狗彘”（犬や豚のごとく振る舞う），“狗彘不食”（犬も豚も食わぬ），“猪狗不如”（豚にも犬にもしからず）などがある。

⑩ “蜀犬吠日”（蜀犬日に吠ゆ）

唐の韓愈の『與韋中立論師道書』にある“蜀中山高霧重，見日时少，每至日出，则群犬疑而吠之也。”（蜀〈四川の別名〉の地は山地で霧が濃く、めったに日が差さないため、太陽が顔を出す度に犬たちはこぞって怪しみ、それに向かって吠え立てる）から生まれた言葉である。見識の狭い人が何でも不思議がることのたとえであり、マイナス評価の書き言葉として、主に改まった場面で、無知で浅はかな人を当てこする際によく使われる。例文：“时代不同了，流行的时装、发型当然不同，何必如此蜀犬吠日呢！”（時代は変わったの、流行のファッションやヘアスタイルだって昔とは違うんだから。もう、そうやって蜀の犬みたいにいちいち大騒ぎしないで）

⑪ “丧家之犬”（喪家の狗）

『史記・孔子世家』に残されている、孔子にしては珍しいエピソードから出た言葉である。孔子一行が鄭の国を訪れた折、城門をくぐった所で孔子は弟子たちとはぐれてしまい、しばらくしてそのことに気付いた弟子たちは血相を変え、すぐに手分けして師を探し始めた。弟子の一人、子貢が道行く人を呼び止め、こんな人を見掛けなかったかと、師の背格好や顔立ちの特徴を説明すると、その人は、「東門の所に、額は堯、うなじは皐陶^{こうよう}、肩は子産に似ている人がいましたよ。ただ足の長さだけは禹よりも若干短かったようですが²⁾。途方に暮れた様子で、“累累若丧家之狗”（ひどくぐったりしていて、まるで主を亡くした宿無し³⁾の犬のようでした）」と答えた。それを聞いた子貢はすぐさま東門へ飛んでいって、無事に師と再会を果たし、早速今しがたの話を孔子の耳に入れたところ、孔子は笑いながらこう言った。“形状，末也。而谓似丧家之狗，然哉！然哉！”（私の容貌についてはともかくとして、私のことを「主を失った犬」と形容したのは言い得て妙、正にぴったりだ）。この成語は“喪家之狗”ともいい、今日では主に、後ろ盾を失って、寄る辺のない人のたとえとして用いられる。人についていうマイナス評価の語であり、よく話し言葉の中で使う。例文：“他穿着一身破破烂烂的衣服，流浪街头，如同丧家之犬。”（彼はぼろをまとい、帰る家のない犬のように、当てもなく街をさまよっている）

⑫ “桀犬吠堯”（桀の犬が堯に吠える）

漢代の鄒陽の著、『獄中上梁王書』の“桀之狗可使吠堯，而跖之客可使刺由。”から出た言葉である。桀は悪逆非道で知られる夏王朝最後の君主、堯は伝説上の上古の聖天子^{せき}、跖は春秋時代の大泥棒、そして由とは高潔の士として伝説に語られる許由のことであり、彼は天下を譲ろうという堯の申し出を拒んだほど清廉な人物であった。先の文の意味は、「暴

君」の犬は主人が吠えろと命じれば「聖帝」にでも吠え掛かり、「大盜」の子分や食客は首領が殺せと命じれば「高士」であろうと刃に掛けようとする、というものである。この一文から“桀犬吠尧”（ここでの“吠”は犬が吠えること）の成語が生まれ、家来や手下が桀の飼い犬のようにただただ主人に盲従し、相手が善人であろうが悪人であろうが、見境なく牙をむくことのたとえとなった。現在では悪人である主人にひたすら尽くすこと、あるいは悪人が善人を攻撃することをたとえて用いる。マイナス評価の書き言葉で、“跖狗吠尧”ともいうが、意味はまったく同じである。例文：“他们这样做只不过是桀犬吠尧，为主子卖命而已。”（彼らがそんなことをしでかしたのも桀の犬と何ら変わりはない、すべてはボスのためにやったまでだ）

⑬ “狼心狗肺”（狼の心と犬の肺）

この成語の文献上の初見は、明の馮夢竜の『醒世恒言・李汧公窮邸遇俠客』の“那知这贼子恁般狼心狗肺，负义忘恩。”（あの野郎がまさかそんな血も涙もない人でなしだったとは）であり、狼や犬のように残忍で貪欲な心のたとえである。比喩的なマイナス評価の語で、主に話し言葉において、恩知らずな人間をなじっていうことが多い。例文：“这个人狼心狗肺，你不要可怜他了！”（こいつは鬼畜のようなやつだぞ、情けは無用だ）

⑭ “狐朋狗友”（狐や犬の友達）

清の曹雪芹の『紅樓夢』第十回にある“恼的是那狐朋狗友，搬弄是非，调三窝四。”（悩みの種はあのたちの悪い仲間たちよ、あることないこと吹き込んで仲たがいをいさせようとするの）から生まれた言葉であり、まじめに働きもせず、一緒につるんで遊びほうける仲間全般を指す。比喩的なマイナス評価の語で、話し言葉、書き言葉、どちらでも用いるが、本人を前にしていうことが多く、よく目下の者に説教する時に使われる。例文：“从此以后，再不许你跟那些狐朋狗友来往！”（今後一切あんな連中と付き合っちゃいけません）“他一个正经朋友也没有，全是些不务正业的狐朋狗友。”（彼の周りにはぶらぶらと遊び暮らしている不良仲間しかおらず、まともな友達は一人もいない）類語に“狐群狗党”，“狐明狗党”などがあるが、こちらは“狐朋狗友”よりもさらにたちが悪く、ぐるになった悪人どものたとえである。

⑮ “声色犬马”（歌舞と色事，養犬と乗馬）

漢代の劉珍が著した『東觀漢記・北海敬王陸』に見える“声色是娱，犬马是好。”（歌と舞，色恋は楽しきもの，犬を飼い，馬に乗るのは良きもの）に基づく語である。“声色”とは歌舞音曲と女色，“犬马”は犬を飼うことと馬に乗ることで，“声色犬马”の成語は遊興三味の淫らで破廉恥な生活を形容する。“声色狗马”ともいい、話し言葉でも、書き言葉でも用いるマイナス評価の語で、人について使う。例文：“他把声色犬马的腐朽生活做为人生的最高目标。”（彼の人生究極の夢は，快樂と道楽の限りを尽くす自墮落な生活だ）

⑯ “犬马之劳”（犬馬の勞）

この成語の出典は『晋書・段灼伝』である。“犬马”とは、封建時代、主君や目上に対して、「喜んであなたにお仕えます」という意思を示すのに用いた謙称で、他人のために一身をささげて忠実に働くことをたとえて“犬马之劳”という。意味的に中性の語で、主として書き言葉で用い、使われる場合にはよく“效”（尽くす）などの動詞の目的語となる。例文：“为使孩子们在激烈的升学考试中如愿以偿，家长们效尽‘犬马之劳’，不辞劳苦。”（我が子が熾烈な受験戦争を勝ち抜いて志望校に合格してくれるようにと、親たちはどんな苦勞もいとわず、家来のようにかしずいて、せっせと世話を焼いている）

⑰ “狗眼看人低”

犬は人を下に見る。“看人低”とは貧乏人を見下すことで、この言葉は、人を地位や財産によって分け隔てすることのたとえである。マイナス評価の話し言葉で、相手の懐具合で態度を変える現金な人間に対する罵倒語として、くだけた場面で用いる。例文：“咱们也是客人，可是态度根本不一样，连理都不理，真是狗眼看人低。”（私たちも同じ客なのに、扱いがぜんぜん違って、サービスのサの字もない。まったく、財布の中身で客を差別するなんて）

⑱ “狗嘴里吐不出象牙”

犬の口から象牙は生えない。この語は晋の葛洪が撰した『抱朴子・請鑑』を典拠としており、『元曲選外編』高文秀の『遇上皇』には、“和这等东西，有什么好话，讲出什么理来？狗口里吐不出象牙！”（こんなやつとまともな話ができるもんかね。一体どんなご立派なお言葉が聞けるっていうんだ。犬の口から象牙が生えるわけがねえ）というくだりがある。程度の知れた人間がためになることを言えるはずがない、という意味のこの慣用句は、比喩的なマイナス評価の罵倒語であり、話し言葉として、多く面と向かって使う。例文：“他这个人狗嘴里吐不出象牙来，最好不要听。”（あいつはろくなことを言わないから、聞き流した方がいいよ）

⑲ “狗改不了吃屎”

犬は糞を食べるのをやめられない。人間の性分はそう簡単に改められるものではないことのたとえで、主に話し言葉で用いるマイナス評価の語である。例文：“这个人偷窃已成恶习，狗改不了吃屎，再教育也无济于事。”（この人は盗癖が骨の髄まで染みついているから、立ち直らせようとするだけ無駄だ）

⑳ “狗上锅台，不识抬举”

犬がかまどに乗る——付け上がって人の好意を踏みにじる。せっかく人が目を掛けて、良くしてくれているのに、それをありがたいと思わないことのたとえであり、マイナス評価の語で、話し言葉で用いることが多い。例文：“人家是在好心好意地劝你，你别狗上

锅台，不识抬举。”（あの方はおまえに良かれと思っておっしゃってくださっているんだから，そのお気持ちを無駄にするんじゃないよ）

⑲ “狗咬吕洞宾，不识好人心”

犬が呂洞賓をかむ——善人の心が分からない。呂洞賓は説話に語られる八仙³⁾の一人で，慈しみ深く，人助けを常としていた仙人である。その呂洞賓にかみ付くというこの言葉は，善悪の区別がつかず，自分に手を差し伸べてくれる人に対して無礼なまねをしたり，攻撃的な態度に出たりすることのたとえで，よく話し言葉で用いるマイナス評価の語である。例文：“你这个人真是狗咬吕洞宾，不识好人心！好心好意告诉你这件事，却挨你的骂。”（本当にあなたって人は，逆恨みも甚だしいわ。せっかく親切に教えてあげたのに，その私をののしるなんて）

⑳ “好狗不挡道”

良犬は道をふさがず。人の行く手を阻んではならないことのたとえであるが，夢を実現しようとしている人の足を引っ張ってはならないという意味もある。マイナス評価の語で，話し言葉で使う。例文：“你走你的路，我走我的路，你我无关，不要找麻烦，好狗不挡道。”（君には君の道があり，僕には僕の道がある。僕たちは何の関係もないんだから，厄介事はお免だ。「良犬は道をふさがず」というだろう）

㉑ “好狗不跳，好猫不叫”

良い犬は跳ねず，良い猫は鳴かない。実力のある人は控え目でおごることなく，一心不乱にこつこつと働き，自分を誇ったり，ひけらかしたりしないというたとえである。意味的に中性の語で，書き言葉，話し言葉のいずれでも用いる。例文：“好狗不跳，好猫不叫。人要谦虚，不要总好出风头。”（能ある鷹は爪を隠すだ。人間は謙虚たるべきで，自己顕示欲の塊であってはいけない）

㉒ “子不嫌母丑，狗不嫌家贫”

子は母の醜さを嫌わず，犬は家の貧しさを嫌わない。親孝行で，仮に暮らし向きが悪くともそれを苦にせず，自分の家を心から大切にすることのたとえであるが，どんな国であろうと，それが祖国であるからには，決して捨ててはならないこともいう。話し言葉でも書き言葉でも用いるプラス評価の語である。例文：“子不嫌母丑，狗不嫌家贫。不能因为自己生活在物质条件好的外国，就忘掉自己的祖国，甚至对自己的国家牢骚满腹。”（子は母の醜さを嫌わず，犬は家の貧しさを嫌わないものだ。自分は何不自由ない外国に暮らしているからといって，母国を忘れ，あげくの果てに非を鳴らすなど言語道断だ）

言語における犬のイメージを次にまとめてみよう。

良い面：

「人に忠実に奉仕する」

良くない面：

「気が短い」、「無能」、「けだもの」、「価値のない命」、「悪の手先」、「嫌われ者」、「駄文」、「ころころ変わる」、「鉄面皮」、「向こう見ず」、「くだらないことをする」、「二東三文の品」、「主人を頼みにする小物」、「下劣で無恥」、「物知らずで何を見ても珍しがる」、「自立心が無い」、「人の言いなりになる」、「凶悪で強欲」、「正業に就いていない」、「金持ちや権力者にしっぽを振る」、「悪癖に染まっている」、「善悪をわきまえない」

犬は最も古くから人間と親しくしてきただけあって、暮らしの中で使われる語彙には犬になぞらえたものが豊富にあるが、その多くは犬を悪く捉えた言葉であり、しかも人に対する罵倒語が大半を占めている。これは人間が犬の卑屈さをさげすんだことによるもので、言語における犬はいいところがないに等しく、哀れの一語に尽きる。

3 民話における「犬」

犬にまつわる最古の言い伝えは、人間と犬が結ばれて人類の祖となったという犬祖伝説であろう。そしてその中で最も広く知られ、かつ最も大きな影響を与えたのが盤瓠^{ばんこ}の神話である。話はるか昔にさかのぼり、古代の帝王、高辛氏が犬戎と攻防を繰り返していたころのこと。いつまでも勝てぬ戦に業を煮やした高辛氏が、「犬戎の呉將軍の首級を挙げた者には褒美として少女を娶らせる」と触れを出したところ、彼の愛犬、盤瓠がこれを聞きつけてすぐさま敵陣目掛けて突っ込んでいった。やがて戻ってきた盤瓠がくわえていたのは何と憎き敵將の首。そこで高辛氏が約束通り少女を与えると、盤瓠は新妻を背に乗せて南の山へと去っていき、その山中の岩屋に身を落ち着けた。後世、彼らの子孫は南方の山地に増え広がったと伝えられているが、実際に貴州省の東部には、現在でも盤瓠を祭り、犬を食べることをタブーとしている一族が複数存在するという。この盤瓠を現代的に解釈すれば、犬の姿をした一種の部族トーテムとなろう。

さて次に犬を取り上げた民話を紹介しようと思うが、その前に、原典とした『中国民間故事集成』について少し触れておきたい。1992年よりISBNセンター⁴⁾から逐次出版されている『中国民間故事集成』は、目下のところ、数多くの中国民話集の中でも最も権威あるものである。ここでいう「民話」の概念は広く、中国の各民族に語り継がれてきた散文体の口承文芸全般を含む。ただし一口に口承文芸といってもジャンルやスタイルは種々雑多で、神話、伝説、笑い話、寓話を始めとして、動物が主人公の動物昔話、人間が主人公の本格昔話、架空のできごとを描いたおとぎ話といったさまざまな物語のほか、ある民族や地域に伝わる独自の形式の口承文芸などがある。『中国民間故事集成』はこうしたバ

ラエティーに富む「民話」を網羅しており、現在までに、吉林巻、遼寧巻、陝西巻、浙江巻、四川巻（上・下）、北京巻、福建巻、江蘇巻、寧夏巻、甘肅巻、西藏巻、河南巻の13巻が出版されている。そしてそこには犬にまつわる言い伝えや昔話が76話収録されているが、ここではそのうち5話のあらすじを述べる。

(1) “狗为啥和人在一起”（犬が人間と一緒にいる訳）

〈陝西巻 P.431より〉

犬はとても寂しがり屋で、飛び切りすごい動物と友達になりたいと思い、友達探しをすることにした。あっちをきよろきよろ、こっちをきよろきよろしながら歩き回っていたところ、山の森でぼったり虎に出くわして、犬は大喜び。早速話しかけて友達になり、一緒に楽しく遊んでいたら、あつという間に夜になってしまい、2匹は仲良く寄り添って眠りについた。ところが夜中に風が吹いて木の葉をかさかさとして揺らし、それを化け物と勘違いした犬が「ワンワン」と吠え出したので、虎はびっくりして飛び起き、目をつり上げて言った。「吠えるな、熊に聞かれたら、おれもおまえもおだぶつだぞ。」これを聞いて犬は思った。ふうん、熊って虎よりすごいんだ。

次の日、犬はこっそり虎のもとを去って熊を探しに行き、何日もかけてようやくお目当ての相手を見付け出した。犬と熊は会うなり意気投合。すぐに大の仲良しになって、気分上々で夜を迎え、互いにぴったりと身を寄せ合って眠った。ところがふと物音を耳にした犬がまたもや「ワンワン」と吠え出したので、熊は目を三角にして言った。「吠えるな、葉っぱがかさこそいってただけじゃないか。猪に聞かれたら、おれもおまえも食われちまうぞ。」これを聞いて犬は心の中でつぶやいた。へえ、猪は熊よりすごいのか。これは是が非でも友達にならなきゃ。

犬は足を棒にして探し回り、何日歩いたのかも分からなくなったころ、とうとうある丘で猪と巡り会った。「猪さん、どんなにあなたを探したことか。みんな口を揃えてあなたのお力を褒めそやしています。是非友達になってください。」犬の言葉にすっかり気を良くした猪はもちろん二つ返事。犬は今度こそ願ったりかなったりの友達ができたと思っていた。ところが夜になり、物音を聞きつけた犬が懲りずに「ワンワン」と吠え出したので、猪は目をひんむいて言った。「吠えるな、獵師に聞かれたら、おれもおまえも殺されちまうぞ。」これを聞いて犬はぼかんとした。あれれ、猪にも怖いものがあつたなんて。獵師、獵師か。

犬は矢も盾もたまらず、獵師を探しに飛び出していき、ついにある山で念願の対面を果たした。それから獵師にお供して、いくつもいくつも山を越えたが、ただ歩いているだけで犬は楽しくて仕方なく、そのうち山に日が沈み、結局獵師の家までくっついていった。夜中に風が吹き、犬は例のごとく吠え出して獵師を起こしてしまったが、意外や意外、獵

師はうれしそうに犬に語り掛けた。「怖がらんでいい、これは木の葉の音だ。これから悪いやつがおまえをいじめたら、そうやって吠えるんだぞ。おれがやっつけてやるからな。」

犬の目からうろこが落ちた。そうか、この世で一番すごくて、一番頼りになるのは人間なんだ。それからというもの、犬はずっと人間と一緒にいるようになったのである。

(2) “人狗成亲” (人間と犬の結婚)

〈浙江巻 P.47より〉

昔々、そのまた昔、盤古が天地を分けたころ、この世には人っ子一人いなかった。では人間はどこからきたかという、それは空から。ある時、わんさと落ちこちてきた虫が人間になったのである。この虫人間はものすごい速さで繁殖し、あれよあれよという間にアリの数ほどにも増えた。ところが肝心の食べ物はどこにもなく、草の根っこや木の皮まで食べ尽くされて、じきにかっぱらいやひったくりが始まり、このていたらくを知った天帝は意を決した。油の雨を降らせて、人間を一人残らず滅ぼしてやろう。

ある日、分厚い真っ黒な雲が空を覆い、「ゴロゴロ」という雷鳴と共に、突然滝のような雨が降り出した。ただし雨といってもこの雨は油の雨だったので、稲妻が走るが早いか炎に変わり、一気に燃え広がった。火の海の中、人間たちは逃げることも隠れることもできず、この世は阿鼻叫喚の地獄と化し、やがてみんな焼け死んでしまった、ただ一人、ある娘だけを残して。その娘は逃げ場を失い、とっさに家の井戸に飛び込んでいたのである。娘の飼い犬もご主人様の後に続いたが、水が浅かったおかげで一人と1匹は溺れ死ぬこともなく、無事大火をやり過ごすことができ、地上の火が消えてから井戸を出た。が、そこに広がっていたのは動くものの姿が一つとしてない、見渡す限りの焼け野原。悲しくて悲しくて、娘がおいおい泣いていると、驚いたことに犬が口をきいた。「ご主人様、何を悲しんでおいでです。この世から人間がいなくなってせいせいしたじゃありませんか。私は見えての通り犬ころですが、腹の中は人間なんかよりよっぽどきれいなもんです。私と一緒に子供を作りましょう。」犬が人間の言葉を話すのをしかと聞いた娘は、この犬はただの犬ではない、ありがたい神の犬なのだと感じ取り、ためらうことなくこくんとうなずいた。こうして娘は犬と夫婦になり、人間は絶滅を免れたのであった。

娘と犬から生まれた人間たちは、みんな犬譲りのしっぽを生やしていた。このしっぽには節が十あって、そのうちの九つが黄色くなったらいよいよお迎えが近付いたという印で、そうなると人間は働くのをおっくうがり、何もしようとしなくなったが、墓だけは自分で作った。そしてその床に板を敷き、水と炒った麦粉をしこたま入れた二つのかめを抱え込んで中にこもり、後はただ死を待つのみ。

天帝はこの有り様を見て、「九つの節が黄色になると、何もせずに食べるだけで、家の蓄

えをすべて食いつぶすとは。このままでは、後に残される者たちが苦しむことになるではないか」と案じ、人間たちに気付かれぬように、そのしつぽを根元からちょんぎってしまった。これ以来、人間は自分がいつ死ぬのかさっぱり分からなくなったのである。

(3) “吃新先喂狗” (初物はまず犬に)

〈四川卷 P.449～450より〉

その昔、我々が暮らすこの土地に水稲はなく、当時、人々の口に入る穀物といえば雑穀があるだけで、この世に米なるおいしい物があるとは、誰一人知らなかった。

そんなころ、ある家で犬を飼っていた。この犬はあちこちをほつつき歩くのが好きで、たまに何日も家を留守にすることがあったものの、そのうちにひょっこり舞い戻ってくるのがいつものお決まりだった。けれどもある時だけは、ふらりと出掛けたまま3年たっても帰らず、飼い主は、今度ばかりはもう戻るまいと思っていた。

一体犬はどこへ。何と、足に任せてどんどん歩くうちに、海にまで出ていたのである。海にざぶんと飛び込んで体を洗った犬は、そのまま前へ前へと泳いでいき、1年余りも泳いだころ、とうとう海の向こう側へとたどり着いた。そして岸に上がった犬の目に飛び込んできたのは、ある家の庭一面に干された黄金色に輝く稲。これは何だろう。試しにべろりとなめてみたら、まあ、うまいの何の。そこで稲の上で転げ回り、体中に稲をくっつけていると、家のあるじが見咎めて追っ払いに飛んできたので、犬は再び海に身を躍らせ、一路ふるさとを目指した。

それからまた1年余りも泳ぎ続けてこちら側の岸に戻り、さらに山を越え谷を越え、やっとこさ懐かしの我が家へ。今回の放浪は3年と6ヵ月に及ぶ長旅だったものだから、帰ってきた喜びもひとしおで、犬は玄関先で元気な鳴き声を上げ、それを聞いて出てきた飼い主は一目で愛犬だと分かり、すぐさま抱きかかえて家に入れた。僕の体には遠い所から取ってきたおいしい物がくっついてるよ、犬はそう訴えたくてずっと鳴き続け、そんな犬をなでていた飼い主は、犬の耳の後ろとしつぽの先から数粒の稲を探り当て、愛犬がはるばる海を渡って稲を手に入れてきたことを悟ったのであった。飼い主はもちろん犬が持ち帰った種の名など知らず、犬が盗んできたものだからと“盗子” (盗人) と呼び、これが“稻子” (稲)、“水稻” (水稲) の語源になったといわれている (“盗” と “稻” は同音)。

明くる年、飼い主は水を引いて田んぼを作り、犬の体から出てきた種を植えてみたところ、秋にはお椀数杯分の稲が取れ、次の年はそれを種もみにして数十斤の収穫を上げた。さらにその次の年には、天秤棒で10回運んでもまだ余るぐらいの稲が実り、それ以来、稲を求めて方々から人々がやって来るようになった。こうして我々の土地にも稲が広まり、米を口にすることができるようになったのである。

犬のイメージに関する一考察

犬が稲を失敬してきてくれたことに感謝して、毎年新米が実るころになると、ご先祖様たちは取れ立ての米を炊き、最初の1膳を犬に食べさせた。

これが代々受け継がれていくうちに、初物を犬に食べさせるのが習わしとなったが、家によっては今でもそれを続けている。

(4) “天狗吃月” (天の犬、月を食べる)

〈四川巻 P.36～37より〉

昔々その昔、天の神様は大きな犬を飼っていたが、この犬はとんだいたずら者で、しょっちゅう月を飲み込んだり、吐き出したりして遊んでいた。犬はこの遊びが面白おかしくて仕方なかったが、下界の人たちにしてみればたまったものではない。何しろ月明かりがないものだから夜は真っ暗。おかげでみんな目を患ってしまったのである。下界の窮状を知った女神の女媧様は、この害獣を退治してやろうと思立ったが、おいそれと勝てる相手ではないと踏んで、人々の夢枕に立った。「神さまの犬を成敗しようと思います。そこで皆さんにお願いがあるのです。鳴り物を鳴らして私に加勢してください。天の犬が月を食べたら、大きな音と声で脅かして、月を吐き出すように仕向けて欲しいのです。」

女媧様が天へ乗り込むと、ちょうど犬はお遊びの真っ最中。女媧様は月を頬ばっている犬に飛び掛かり、馬乗りになって首根っこを押さえ付け、月を吐き出さないかと迫った。そのころ下界では、月が消えてしまったのを見て、人々が手に手に銅鑼やたらい、鍋のふたを引っかき、わらわらと家から飛び出してきて、おのおのの得物を打ち鳴らしながら、大音声を張り上げた。「天の犬が月を食っちゃったぞ、それやっつけろ、やっつけろ」、「殺せ、殺せ、俺たちのお月様を返せ。」この騒ぎに犬はびっくり仰天。女媧様に締め上げられている痛みも相まって、すぐに月を吐き出した。そこですかさず女媧様が、「こいつめ、二度と再び月を食べたりしないでらうね」とすごむと、犬はぶるぶると体を震わせながら、「女媧様、もうしませんから」と訴えた。それでも女媧様は手を緩めない。「今度やったらどうしてくれよう」と迫る女媧様に、「ご勘弁ください、こんりんざい致しません。もしまたやりましたら、その時はどうぞ私を絞め殺してやってください」と犬は平身低頭。それに免じて、女媧様は犬を許してやることにした。

とはいえ、悪い癖はなかなか抜けないもの。喉元過ぎれば何とやらで、それから犬は時々月を飲み込もうとしたが、下界から人々の立てるけたたましい音が聞こえてくると、大慌てで吐き出すのだった。

これがよくいう、「天の犬が月を食べたら、すぐに鉦や太鼓を打ち鳴らせ」のいわれである。

(5) “狗和猫的传说” (犬と猫のお話)

〈甘肅卷 P.286～287より〉

昔々ある人が、これさえあれば欲しいものが何でも手に入るという金の腕を手に入れ、忠実な愛犬と愛猫に番をさせた。

ところがある晩、鼠たちにお腕を盗まれてしまい、明くる日、ご主人様は大目玉。お腕を探しに行けとの厳命を下された2匹は、すぐに食糧を背負って家を後にし、鼠のにおいをたどりながら来る日も来る日も歩き続けて、やがて大きな川のほとりへとやって来た。猫は、「この川をちょっと渡れば、鼠の巣はすぐそこだ」と威勢のいいことを言ったものの、実は川の大きさにすっかり足がすくんでいて、得意の猫なで声で犬をおだて始めた。「犬さん、犬さん、ここはあなたの腕の見せ所ですよ。よくいうじゃありませんか、『豚は川を渡り、犬は海を渡るが、猫が水に落ちたら浮かんでこない』って。」おめでたい犬は、「よしきた」と快く応じて川を渡り、腹ごしらえをしてから鼠の巣へ乗り込んでいき、目指す金の腕を取り返して食糧袋にしまうと、来た道を急いで戻り、再び猫と合流した。それから何日か歩いたところに猫がへたり込み、犬は猫をおぶって前へ前へと歩を進めていたが、家の手前の木の下に差し掛かったところで、さしもの犬もついに精根尽き果てて倒れてしまう。これは大変、と一旦は慌てた猫だったが、すぐに良からぬ考えを起こした。手柄を横取りしない手はないぞ。そこで猫は金の腕を引っ提げて、とっとと家へ帰っていった。その前に、残っていたわずかな食料をちゃっかりさらえて。

帰宅した猫はご主人様から手厚くねぎらってもらい、「犬はどうした」と聞かれて、いけしゃあしゃあと答えた。「あの大きな木の下でぐうぐう寝ていますよ。金の腕を取りに行ったのは私だけで、あいつは何にもしなかったんです。」これを聞いたご主人様は怒り心頭。棍棒を握り締めて外へ出ていき、犬を見付けると、さんざんののしりながら、したたかに打ち据え、この仕打ちの訳を聞かされた犬は、ただただ涙するばかりであった。

ご主人様は犬のこの「お手柄」をいつまでも忘れず、犬には洗い物をした汚い水を与えて、家の外で門の番をさせたが、猫には自分たちと同じ食べ物をやり、自分たちと一緒に家の中で寝かせた。

犬が猫を目の敵にして見ればかみ付き、猫はすたこらさっさと木の上に逃げるようになったのはこれ以来のことである。

民話(1)もまたよく知られている神話で、これと似たような神話や伝説はいくつもあり、犬が人間に依存するのは生まれつきの性質であるとする考えの最も有力な傍証とされている。こうした昔話をもって決定的な定説とするわけにはいかないが、犬の家畜化の過程を

知るよすがにはなろう。民話(2)は先に触れた盤瓠の神話と同じタイプのもので、このような、人間と犬が結婚する異類婚姻譚は数々残っているが、とりわけ一部の少数民族の伝承に多く見られ、古代における犬へのトーテム信仰を側面から裏付けている。民話(3)は犬が人類に稲をもたらしたという話である。犬による稲の獲得神話は民族によって伝承に若干の違いがあるものの、犬に対するトーテム信仰が広く行われていたことを示す格好の材料となっており、この犬と五穀にまつわる神話について、中国の神話学者、陶陽と鐘秀は次のような見解⁵⁾を述べている。“狗在取五谷谷种神话中曾经扮演了重要角色，它们或者自己去取，或者配合人一起去取，总之，在初民们看来，离开了狗，得到谷种简直就是不可能的事。这究竟是什么缘故？考察起来，原因有三。其一，考古学的结果告诉我们，人类最早饲养的动物是狗。而且，在生产工具极落后的条件下，狗作为人们忠实的伴侣确实帮了大忙，因此，狗帮助人们去取五谷种，在初民们看来就成为理所当然的事。其二，谷穗形似狗尾，因而把取谷一事同狗联系起来，也很自然。其三，奉狗为图腾可能是最主要的原因。……由于这种认为狗和自己有亲缘关系的观念，初民们也很自然地相信各种的恩惠是狗给他们带来的。”(訳：五穀の種獲得神話において犬は重要な役割を演じており、犬だけで、あるいは人間と共に稲を取りに行くが、いずれにせよ原始人たちは、犬がいなければ、稲を得ることなど到底不可能であったと考えていた。その理由は三つ考えられる。第一に、考古学の研究成果から、人類が最初に飼育した動物は犬であることが明らかになっているが、生産用具がまだまだ未発達であった環境下で、犬は人間の忠実なパートナーとして大いに役立ったであろうことは間違いなく、ゆえに犬が人間のために五穀の種を取りに行ったと考えるのは、原始人たちにしてみれば、至極当然のことであった。第二に、稲穂の形は犬の尾に似ており、稲の獲得と犬が結び付けられたのも十分にうなずける。第三に、犬をトーテムとしてあがめていたことが最大の理由であろう。……犬と自分たちには血縁関係があるとする考えから、原始人たちはごく自然の成り行きとして、さまざまな恩恵は犬がもたらしてくれたものと信じるに至ったのである)。民話(4)のような、天の犬が月を食べるといふ神話もやはり広く伝わっている。庶民の間には、天の犬が、月はおろか太陽までも食べてしまうと伝えがあり、天の犬が現れて悪さをすると、人々は太陽や月を救い出すべく銅鑼や太鼓を賑やかに打ち鳴らして、それを撃退していた。太陽や月が食べられるというのは、実は何のことはない、単なる日食、月食に過ぎないのだが、この自然現象を古代人たちが直感的に捉えた結果生まれたのが、天の犬が月を食べるといふ神話である。民話(5)に類する犬と猫の言い伝えも数多く語り継がれてきた。ストーリーはどれも似たり寄ったりで、ずる賢くて怠け者の猫とお人好しで忠義者の犬、といった具合に、猫と犬を対照的に描いているが、この手の話にしる、忠犬が主人を救う物語にしる、そこに映し出されているものはまったく同じであり、それは犬の忠実で勤勉な気性

にほかならない。以上から分かるように、民話における犬のイメージはおおむね肯定的で、正義感と勇気にあふれ、人間のために多大な貢献をした功労者と、実に好ましい。人間のごく身近なパートナー、それが犬なのである。

4 「犬」と十二支

十二支の動物の並び順はいかにして決められたのか。この謎については巷間に諸説ある。例えば宋の人、洪巽が『陽谷漫録』で述べているところによれば、十二支の動物は足の爪の数が奇数か偶数かによって配列されていて、犬は爪が5本なので、奇数位に置かれたという。しかし動物の家畜化という点から考えると、人類が最初に友とした動物は犬であり、順当にいけば犬こそ十二支のトップに来るはずなのだが、実際はまったく逆で、その位置付けは下から2番目の十一位、かろうじて豚⁶⁾よりはましといった程度でしかない。明代の学者、朗瑛は12の刻の配分と動物の習性の特徴から12の動物の配列の由来を考察し、戌の刻と亥の刻は、辺りが夜の闇に包まれてひっそりと静まり返る時分であり、このころ犬は夜の見張りに立ち、豚はぐっすりと眠ることから、戌に犬、亥に豚が当てられたのだとした。つまり、夜の7時から9時に相当する戌の刻は、子の刻を起点として考えていくと、ちょうど犬が夜番をしている時間となり、これがために犬は十一位に甘んじることになった、というのである。それでは次に、民間で親しまれている占いの小冊子で、戌年生まれの人性格はどのように判断されているか見てみよう。

“属狗的人与十二属相中大部分人有共同点：他们直率，诚实，为人仗义，对事公平，勤奋好学。属狗人的活跃，特别引人注目能得到异性的好感。一般说来，属狗人为人坦诚，不装腔作势，他们好打抱不平，当你遇到麻烦和被人欺负时，只要你有求于他，他定会毫不犹豫地前来相助。除此之外，属狗人的性格是热情的，仁爱的，也是慷慨大方的，从不愿与人摩擦和斤斤计较，就是你把他得罪得再深，他也转眼即逝，从不耿耿于怀和打击报复。他们生气时，肯定是面对错误，而不是嫉妒。他们的言行与别人发生冲突后，他们总是抱着解决问题的态度，而决不记恨于心。属狗人的眼睛，心灵都警觉，他们愿意对人类社会发展做出努力。可以说属狗人在工作中一向是勤勤恳恳，忠于职守，简直就是正义的化身。属狗人注意实践，说话直爽，算数，英勇无畏，对每个人都能作出正确判断，就是他不喜欢的人，也只能默不作声和持冷淡态度。出生在狗年的人不大重视钱财，为人慷慨大方，但他们确实需要钱时，没人能像他们那样具有找钱财的能力。在大多数情况下，属狗人都是出生在良好的家庭中，否则，他们会脱离家庭，靠自我奋斗来提高自己的生活地位。属狗人与人争吵时，方法总是公开的，从不在暗处做手脚，获得胜利。他们能胜任军事工作，能成为优秀教师，律师，医生，法官和运输业的领导人，还会以和平主义观点支

犬のイメージに関する一考察

持和开展社会活动。”（訳：戌年生まれの人には、干支を問わず多くの人と共通するところがある。それは率直かつ誠実で、義理堅く、何事にもフェア、そして勤勉で向学心に富んでいる、という点である。戌年の人には独特の華があり、異性にもてるが、それはすべてこの干支ならではの快活さのおかげ。うそ偽りがなく、飾らないというのが一般的な戌年像で、弱きを助け強きをくじく正義の味方タイプだから、トラブルに巻き込まれたとか、嫌がらせを受けたという時には、戌年の人に頼るのが一番。一も二もなく飛んできて助けしてくれるに違いない。親切で思いやりがあり、おおらかな戌年生まれは、人とのいさかきを好まず、細かいことをいちいち気にしないが、ひどく怒らせれば、さすがの戌年もそっぽを向いてさっさとどこかへ行ってしまう。ただし、いつまでもしつこく根に持ったり、仕返ししたりはしない。腹を立てていても、罪を憎んで人を憎まず、というのが戌年生まれだからである。また、その言動が原因で人ともめてしまったら、必ず問題を解決しようという態度で臨み、恨みを抱くことは決してない。目も心も敏感な戌年生まれは人類社会の発展に貢献したいと願っていて、日夜こつこつと仕事に励み、職務に忠実で、絵に描いたような正義の人。実践をモットーとし、本音で語って、言ったことはきちんと守り、勇敢でひるまない。それに人を見る目もあって、嫌いな人とは口もきかず、つっけんどんにあしらう。金銭欲がそれほど強くないので気前がいいものの、いざお金が必要となった時の戌年の集金力は、誰にもまねできない。戌年生まれの多くは恵まれた家庭に育つが、そうでない場合は家を出て、自分の腕一本で、より良い生活を目指してがんばる。口論する時は決まって大っぴらにやり、陰で手を回して勝とうなどは考えもしない。戌年の人々の適職は軍関係の仕事で、そのほか教師、弁護士、医者、裁判官、運輸業の幹部職員にも向いているが、平和主義の考えにのっとり、社会活動に協力するか、自分で社会活動を始めるのも良いだろう）

ここで戌年生まれの人の性格をまとめておこう。

良い面：

「竹を割ったような性格」、「正直」、「律儀」、「公平」、「勉強家」、「活発」、「進んで人助けをする」、「優しい」、「情け深い」、「太っ腹」、「些細なことにこだわらない」、「実直に働く」、「約束を破らない」、「恐れを知らぬ勇気を持ち主」、「冷静」、「自力で努力する」、「こそこそしない」

何と良くない面は一つもなく、十二支における犬は完璧といえるだろう。

5 おわりに

犬は生まれながらにして勇猛で闘争本能が強く、嗅覚、視覚、聴覚、触覚がいずれも抜

群に鋭いことに加え、活動的で眠りが浅いため、夜警に打って付けであり、狩猟の場では名アシスタントぶりを発揮して、獣を巧みに追い詰める。犬と人類が遠き昔に厚い友情で結ばれたのは、彼らにこうした数々の特長があればこそであった。動物の家畜化が始まったのは旧石器時代のころであり、犬は人類が最初に飼い馴らした動物の一つ、つまり人類にとって最も付き合いの長い友であることは、世界の考古学界の共通認識となっている。古代、犬は豚小屋を見張り、羊の群れをまとめ、狩りに出れば獲物を追い立てるなど、さまざまな面から生活を支えてくれる人類の良き片腕であった。また家の番をさせても一流で、異変があったら直ちに主人に知らせて家人の安全を守り、さらに北の地方では、そりを引いて食糧を運ぶという役割も果たしていた。犬と人間はこんなにも親しく、犬崇拜の遺風も今なお残っているにもかかわらず、古代中国の民俗語彙における犬のイメージは概して芳しくない。ほかの十二支の動物には、“牛馬精神”（牛馬のごとく働き、人に奉仕する精神），“龙虎气象”（竜虎のように気高く雄々しい気風）などに見られるように輝かしいイメージがあるが、それに比べて犬は見劣りするばかりか、“狗”の字が付けば、その言葉は即マイナスのニュアンスを帯びるものと相場が決まっている。人間は犬と切っても切れぬ絆で結ばれた当初から、犬の忠実さ、従順さ、利口さを称えつつも、他方では犬の奴隷根性を卑しむという裏腹なスタンスを取り続けてきた。かくして、不思議な力を持つ忠犬の伝説が多々生まれると同時に、自主性に欠ける犬をこき下ろす言葉も生まれることになったのだが、実はこれらは、犬の一つの特徴について、そのプラス面とマイナス面を解説した表裏一体のものなのである。

注

- 1) 官吏の糾弾、監察をつかさどる役職。
- 2) 堯、皐陶、禹はいずれも伝説上の古代の聖賢、子産は鄭の国の高名な政治家である。
- 3) 中国で最も親しまれている8人の仙人、鍾離・張果老・韓湘子・鉄拐李・曹国舅・呂洞賓・藍采和・何仙姑をいう。さしずめ日本の七福神のような存在である。
- 4) ISBNは“民間文学集成全国編輯委員会”の略称である。
- 5) 陶陽・鐘秀（1989）『中国創世神話』P.278～279 上海人民出版社
- 6) 中国でも十二支の十二番目の動物は“猪”であるが、中国語の“猪”は「イノシシ」ではなく「ブタ」を指す。

主要参考文献

- (1) 郝懿行 『爾雅義疏』 北京市中国書店影印本
- (2) 邱崇西 (1983) 『俗語五千條』 陝西人民出版社
- (3) 北京大学中文系 (1987) 『歇後語大全』
- (4) 鄭宣沐 (1988) 『古今成語詞典』 中華書局
- (5) 劉潔修 (1989) 『漢語成語考釈詞典』 商務印書館
- (6) 張清常 (1990) 『胡同及其他』 北京語言學院出版社
- (7) 武占坤・馬国凡 (1991) 『漢語熟語大辭典』 河北教育出版社
- (8) 吳裕成 (1993) 『人與十二属相』 天津大學出版社
- (9) 馬如森 (1993) 『殷墟甲骨文引論』 東北師範大學出版社
- (10) 袁珂 (1993) 『中国神話通論』 巴蜀書店
- (11) 王紅旗 (1997) 『神妙的生肖文化與遊戲』 山東友誼出版社
- (12) 張皓 (1997) 『十二生肖』 湖北教育出版社
- (13) 史有為 (1997) 『成語用法大辭典』 大連出版社
- (14) 『漢語大詞典』 (1990～1993) 漢語大詞典出版社
- (15) 『語海』編輯委員會 (1999) 『語海』 上海文芸出版社
- (16) 『古代漢語詞典』 (1999) 商務印書館